



祐介の目

大田ゆうすけ No.28
(福山市議会議員)

毎月1日号に掲載

風化させてはならない。70年前に日米の決戦場として踏みじられた島にもかかわらず、住民の多くは親日的であり、多数の日本兵慰霊碑の管理も行ってくれている。台風一過、今こそ70年前の贖罪と恩返しをする

タクロバン市の支援について

昨年の11月8日、観測史上最大規模の台風により甚大な被害を受けたレイテ島のタクロバン市は福山市の親善友好都市である。レイテ島の戦いは大東亜戦争における天王山と言われ、8万人の日本兵が戦死した鎮魂の島であり、現地住民も多数が巻き添えとなった。

昭和55年、レイテ島で玉砕した福山歩兵第四連隊の慰霊団に同行した中川市長が、タクロバン市のシンゴ市長の求めにより姉妹都市提携を結んだ。ところが中川市長は、市議会はもちろんな市の幹部にも諮っていないかったため、帰国後にひと悶着あり、提携は無効との声も上がった。

その後30年間、行政間の交流は無かったが、私が議員になってから「タクロバン福山交流支援センター」を立ち上げ、この問題に取り組んだ。提携の過程はどうあれ、レイテ戦の記憶を

時が廻ってきたように感じる。幸か不幸か今まで誰も知らなかったタクロバン市が、いまや世界中で知らない人はいない。福山市の支援のあり方が問われた。そこで福山市から200万円、市議会から40万円の見舞金を支援センターに寄附していただき、私達の人脈で被災地のニーズを把握して、隣のセブ島より軽トラやパソコン・プリンター等を調達してフェリーで送った。自衛隊や赤十字等の団体に負けない効果的な支援が行えたと自負している。また、支援センターに寄せられた義援金も年末までに250万円に達し、フィリピンを思う方がこれほど多くいらっしやる事に感激した。これは全壊したタクロバン市民病院の復旧に充当される予定だ。

クリスマスには支援センターのメンバーや小林史明衆議院議員と現地を訪問し、被災状況の視察と支援物資の手配を行い、ロマルデス市長と固い握手を交わしてきた。